
THE SHOES



FERDINANDO

GILLETTEの男、靴

何が違うのか

1984年11月10日、午前9時30分のことだった。父が私の寝室のドアを開け、光を入れて言った。「ナンド、カラビニエーリが玄関に来て、お前に用だと言ってる。いったい何をしでかしやがった」

「父さん」と私は言った。「冗談だろ。寝かせてくれよ。今朝帰ってきたの、遅かったんだ。昨日はメラニアにぼろぼろにされたんだから」

「メラニアってのはどこのどいつだ。さっさとケツを上げて、顔を洗って、服を着て、こっちへ出てこい。話をして、何の用か聞いてみろ」「わかった、いま行くよ」

ポスカ准尉とパタネ副軍曹は私の身分証を確かめ、それからこう告げた。「11月17日にカゼルタのフェッラーリ・オルシ機甲部隊学校に出頭して兵役の義務を果たさなければ、軍検察が明日の朝いちばんに逮捕状を出します。我々が迎えに来て、刑務所へ連れていくことになります」

私は2人を見て言った。「コーヒーでもどうです。いま起きたばかりなんで。すぐ戻りますから、この映画の後半を聞かせてくださいよ。いや、あなたがた、面白いですね」

父はカラビニエーリたちに、こいつは頭がどうかしているんですと身ぶりで伝え、2人は間を置いた。台所から戻ると、私は召集令状が届いているはずだったのかと尋ねた。彼らは、母の署名のある受領証を持っていた。母はちょうどそのとき、仕事に出ていた。

私はもう一秒も無駄にせず、行き違いを詫び、当日には必ず行くと請け合った。12か月のあいだ、ヨーグルトのように期限が切れるまで着つづける、あの服に袖を通す覚悟で。

支度をした。出発の夜、父は腕をひと振りして別れを告げた。手持ちのわずかなりラ — いまの10ユーロ相当だ — に少し足してくれと頼むと、父は言った。「もたせろ。月に6万リラもらえる。それだけで暮らすんだ」

母は眠っているふりをして、返事をしなかった。午後11時45分、友人のオレステが父親のフィアット850で家に来て — 父親は鉄道員だった — 駅まで送ってくれた。あのとき私は、両親のふるまいを理解していなかった。2人のしたことは、私には普通に思えた。あれが私の最初の、本物の教訓だった。

翌朝6時10分にナポリに着き、そこからカゼルタ行きの列車に乗った。駅で兵営への道を尋ね、門までさらに30分歩いた。当直将校に申告すると、彼は言った。

「また遅刻組か、84年9期」。私は新しい家に入ろうとしていた。そこを出るのは1年後になる。

すぐに補給係へ回された。支給されたのは、背囊、戦闘靴2足 — 短いのと長いの — ベルト、毛の靴下、飯盒2つ、カップ、水筒、薬を入れる鋼鉄の箱、運動靴、迷彩服、帽子、礼装、営内用のフェズ帽、第一次世界大戦からそのまま出てきたようなトランク2枚、そして長袖の毛の肌着2枚。私は笑った。あの肌着がどれほど命を救ってくれることになるか、まだ知らずに。

映画のなかにいるようだった。口笛を吹きながら外へ出ると、向こうから来た将校が私を呼び止め、敬礼をしなかったかどで2日間の懲罰をくれた。運命は、私が48時間、誰にも会わずに寝台に閉じ込められることを決めたのだ。

2日つづけて、朝は便所当番だった。280人の男が糞をしたあとの便器の掃除である — しかも全員がうまく中に収められたわけではない。嫌悪は感じなかった。それもまた兵役だった。誰もが同じ色の糞をするわけではないこと、そしてそれが食い物のせいだけではないことを、私は見て、学ばなければならなかったのだ。

1週間後、私の故郷の近くの出の戦友が会いに来た。名前はフランコ・ニコロ、84年5期。娑婆では、世界的に有名な靴ブランドのセールス担当だった。彼は私を気に入ってくれた。40日後、私のために48時間の外出許可をどうにか取りつけてく

れて、私たちは彼の車で一緒に故郷へ飛んで帰った。道中8時間、だがその値打ち
はあった。

家に着くと、母は私に、脱走してきたのかと尋ねた。もっとずっと長いあいだ、
厄介払いできると思っていたのだ。日曜の真夜中、フランコが迎えに来て、私た
ちは帰りの道を走りだした。

車に乗り込むと、彼は5リットル入りのワインの瓶を脚のあいだに挟んで持ってい
ろと言った。彼の准尉への土産だった — 機嫌を取っておくための手だ。ところ
が兵営に着くころには、私たちは酔っぱらっていた。すぐさま2日間の病欠を届
け出た。

その後、ある将校が人前でフランコを脅した。フランコは言い返した。「兵営か
ら一步でも外に出たら、お前を撃ってやる」。将校は彼を逮捕させ、軍法会議にか
けた。軍刑務所で60日を食らった。

そこで彼に会うことは二度となかった。私がよそへ転属になったからだ。だがあ
の時期が終わると、私たちはよく職場の近くで会って一緒に飯を食い、准尉のワ
インを思い出した。

彼はセルフサービスの靴屋を何軒か開いていて、商売は順調だった。何か買いに
寄るたびに、私は王様のような扱いを受けた — 割引の上にさらに割引だ。だ
が、彼が私より腕のいいセールスマンだということは、私だけが知っていた。ひ
と言も口にしなかった。私はすでにGILLETTEの男だったのだ。

新兵訓練センター

訓練が始まった。小銃を分解して組み立てる。それから別の小銃、それから拳
銃。その手入れ。行軍、駆け足、休憩、食堂、兵営のあちこちの必須の勤務、兵
の食堂、下士官の食堂、そして将校の食堂。

クリスマスだった。夜の9時、凍えるような寒さ。あの毛の肌着は命綱だった。と
りわけ最初の歩哨勤務が始まってからは。それから褒美として、火薬庫の警備を
15日間あてがわれた。体を洗うことなど蜚気楼だった。パンツのなかでは、もは
や寄生虫と垢の区別も、ほくろとシラミの区別もつかなかった。

気温は正気の沙汰ではなかった。氷点下30度。小便をするのは不可能だった — 凍ってしまい、ちんぽに小便のつららをぶら下げたまま歩きまわることになる。あはははは。

そして居眠りしようなどと考ただけでも、懲罰と刑務所の危険があった。どこへ送られるかは問題ではなかった。私たちはまさにそこで、囚人と弾薬工場のあいだで、歩哨に立っていたのだから。

ある非番の晩、私は将校食堂から少し離れたところにいた。香水をまとった美しい女たちが、魅力と権力を放つ将校たちと連れだって舞踏会にやってくるのを眺めていた。そして、機甲騎兵の大尉として軍を去った22歳の父が直面したにちがない難しさを、理解しはじめた。戦車。まさに私が操縦するはずだったもの。ただ、私の体は中に入らなかったのだが。

ところがある午後、中隊長が私を呼び出して、外での任務を言い渡した。ある女性に付き添って、車でナポリまで行くこと。誰なのかは誰も教えてくれなかった。あとで知った。兵営を指揮する将軍の娘だった。

白羽の矢は私に立ち、その理由を教えられる者は誰もいなかった。私は兵士であり、これは公式の任務で、手当も別に出た。だが、金がすべてではなかった。

彼女の名はカルラ。38歳、結婚したこともなければ、婚約したこともない。美しいという言葉ではとても足りない — 控えめに言っても、挑発的でいたずらな女だった。

それは私の初めてのチン善事業で、まったく悪くなかった。彼女がまた私を探していたと聞いたが、そのころには私は陸軍の体育中隊に移されていた。ラグビーをやっていて、のちに軍の代表チームに入った。

靴

靴というものを、私たちはめったに真剣に考えない。体にも頭にも、とてつもなく大事なもののなのに。あのころは、革でできていることがなおさら大事だった — 足を乾いたままに保ち、体全体を働かせてくれる唯一の素材だったのだ。

私は靴をたくさん履きつぶしたことがない。持っていたのはごくわずかで、いつもいままある靴を直そうとした。大事なものは機能であって、見た目ではなかった。好きな靴で、好きな相手のケツを蹴飛ばせばいい。ブランドのラベルが付いているかどうかなど、誰にも見えやしない。

今日、妻がセルフサービスの靴屋に寄ってくれと言う。その店がかつて戦友のフランコのものだったことを思い出し、私たちは中に入る。

40年が過ぎた。店は昔のままだ — 配置も同じ。妻は靴を選びながら、試し履きのベンチへ向かう前に、箱を私に持たせる。

そのあいだに、ひとりの女性が婦人靴売り場はどこかと尋ね、私は道を指さす。ひとりの紳士が、ある靴のサイズ41はあるかと尋ね、私はそのサイズは売り切れだと答える。靴を試している2人の女性が意見を求めてきて、私は、その靴を履いたおふたりは素晴らしいと答える。

妻は何も気づかない。20分のあいだ、自分でも気づかぬうちに、私は店員になっていた。みんなが私のところへ来る。男たちには冷たく、ぞんざいに答え、女たちには、その選択への賛辞を惜しみなく贈る。

レジは人でいっぱいになり、パンク寸前だ。店主には何が起きているのかわからない。私たちは靴の代金を払って出ようとするが、その前に私は、フランコを知っているかと尋ねる。「ええ」と彼は言う。「父です」「それなら、よろしく伝えてください」

店を出るとき、女たちが私を指さして手を振る。妻はまだ何も気づかない。

問題が起きるのは2時間ほどあと、娘がああ靴屋に戻りたいと言いだしたときだ。店で、店主の息子が私を脇へ連れていって言う。「フレーガさん、レジでは何も申し上げませんでした。お客さんに聞かれて、騒ぎになるのが嫌だったんです。父は2021年にひどい事故に遭いまして、2023年に亡くなりました」

心から気の毒に思う。私は彼の父親と一緒に体験した話をひとつ息子に聞かせ、彼は目に涙を浮かべて、私を強く抱きしめる。

娘が靴を買い、代金を払い、私たちは店を出る。別れぎわに、息子が声をかけてくる。「また顔を見せてください。あなたみたいな、ただで働いてくれるセールスマンがうちには必要なんです」。そこで私は言う。「私の本、ダウンロードしてないでしょう」

彼は微笑む。そして人生はつづく。

フェルディナンド